

## 久高島の祭祀組織の変容 その後

「久高島の祭祀組織の変容」を発表して二年経過した平成五年三月、久高島を訪れて調査した。折しも旧暦三月三日の浜下りの当日でもあり、神事について尋ねやすい状況であった。

この数年間に数名の神人が誕生しており、また今後を探る動向もうかがうことができた。なお、文中で〇年前とあるのは平成五年を起点にしている。

**外間根人** 根人には外間根人と久高根人がいて空席になっていたが、ハニマン（鍛冶神を祀る男神人）が外間根人を兼任することになり、今年の正月行事で島人に披露した。久高島の正月行事は外間殿で行われるが、高級神女たちは拝殿内に座を占め、男神人をはじめとする島人は神格や年齢順に所定の庭の座に座ることになっている。そして、根神の責任の下で外間ノ口とともに神人をはじめとする島人と盃の交換をして祝福を与えるのが恒例になっている。しかし、今年に限って高級神女たちだけが座る拝殿内にハニマンが初めから座り、外間ノ口との盃の交換を一番に行つて外間根人になったことを島人に示した。恒例では外間根人は男神人たちの上座に座るが、両根人が不在の時は

## 畠山 篤

ハニマンが上座にあるため、従来の席順では外間根人に就任したことを示しえないことになる。そこで異例ながら拝殿に登つて外間根人への就任を示すことになったという。外間根人は外間家あるいはその家筋（外間門中）から出ることになっているが、ハニマンは下茂門中に属し、血統を重視する慣例を破っているという批判がある。この二重の異例は、いつまでも根人を空席にしておけないという危機感に基づいた対応であった。当初問題があつても何の不幸もなく、このまま根人として落ち着いてくれればいいという島人の反応もある。これは、異例なあり方から生まれる崇りを恐れる感情を持ちながらも、根人の継承が定着するように願うもので、島人の複雑な気持ちをよく示している。このところ長らく両根人は悲運にあつてきていた。

**外間ノ口の掟神** 現外間ノ口の娘が三・四年ほど前に外間ノ口の掟神（御前居）に就任した。外間ノ口殿内に神人たちが集まり、掟神就任のサーカス（タカスとも）を執行了。サーカスとは神人になるための略式の資格授与式である。五月のマブツチ祭り（粟の初穂祭）の前夜の戌・己の吉日を選び、三アムトウ（外間殿と両ノ口殿内）やクボー

御嶽などの代表的な御嶽、拝所を、ノロをはじめとする国神たちとともに拝んで行う儀式である。イザイホーの二日目の夕方に行う七つ橋渡り（午歳生まれや妊婦が対象になる）もサーカスで、本来なら一日目の夕方の七つ橋渡りに参加すべきものであった。

ヒチヨージヤ 四月と九月に執行されるカンジャンナシーに参列する神人としてヒチヨージヤがいるが、既に生まれている神人の他にその姪が四・五年前に就任したという。既にいる神人の務める神は兄（弟）神で、その姪の務める神人は姉（妹）神だという。ともにニライカナイからの来訪神で、来訪神はみな色物の神衣裳を着る。男神のヒチヨージヤは一日目は赤衣裳、二日目は青衣裳を着、女神のヒチヨージヤは一日目は赤衣裳、二日目は緑の衣裳を着るという。姪のサーカスはまだしていないというから、正式には神役に就任していないことになる。アカカンジャンナシー 同じくニライカナイからの来訪神としてアカカンジャンナシーがいるが、これも三年ほど前に生まれ、サーカスを済ませている。平成四年四月のカンジャンナシーから参列しているという。祭りの一日目は赤衣裳を着、二日目は青衣裳を着ている。

村頭とソールイ 村頭を務めた者だけが漁の神人・ソールイに就任できるが、島人は三・四年ほど前から村頭に就くことを拒み出している。村頭就任を拒む理由は、(1)村頭は夫婦で務めることになっているが、本人も妻も島を離れているとか、(2)仕事が忙しかたである。そこで、村頭がエラブ漁に従事することに注目し、その利益を分与するという利権によって希望者を募り、辛うじて村頭につなぎとめているという。かつては村頭もソールイと同様に二年任期で、外間と久高から隔年で

生まれ年の順に就任したため、仕事は円滑に継承されていたが、職務軽減を図ってかなり以前に一年任期にしたため円滑さを欠くようになってきたという。そして今また村頭への就任を拒むことが頻発している。この秩序の乱れはやがてソールイの就任に悪影響を与えると考えられる。

ナンチュの認定 一般神女の最下位にあるナンチュの不足は深刻になりつつある。そこで十一月のフバワクで神女昇格や退役があるので、この祭りで今年あたり三十歳以上の数名のナンチュを補充しないと祭祀組織に大きな歪みが生じてしまう。イザイホーを催せない以上、フバワクで一般神女の資格を与えたらどうかという機運があるという。これも一種のサーカスであろう。イザイホーが成立する以前はフバワクにナンチュの加入儀礼が含まれていたらしいことは、拙論で述べてきたところなので、イザイホー以前の祭りに回歸しても何の不都合もないはずである。

フィリピンからの嫁にしろ、ヤマトンヂ日本人の嫁にしろ、ナンチュとして祭祀組織に加えたいという考え方もあるが、一方で祖霊につながる御嶽のウプティシヂ（オボツ霊力）の継承があるから加入できないという伝統的な考え方もある。

以上、祭祀組織を保ち、祭りを続けようと苦闘、苦悩している島の状況がうかがわれた。